



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	女子サッカー選手の労働と生活に関する研究：不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	申, 恩真
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第14414号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81779
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	SHIN_Eunjin_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学） 氏名：申 恩真

主査 准教授 辻 智子
審査委員 副査 教授 池田 恵子
副査 特任教授 小内 透
副査 教授 石岡 丈昇（日本大学文理学部）
副査 名誉教授 飯田 貴子（帝塚山学院大学）

学位論文題名

女子サッカー選手の労働と生活に関する研究
—不安定な競技実践形態とアスリート・アイデンティティをめぐるエスノグラフィー—

本論文は、日本における女子サッカー選手の競技活動とそれを可能にする労働と生活がどのように相互に関わりあいながらいとなまれているかを、アスリートへの自己同一化を追い求める彼女らの実践を踏まえて、選手の視点から実証的に明らかにすることを目的としたものである。

研究成果として評価に値するのは主に以下の3点である。

1 つめは、チームと選手の秩序や統制にかかわる次のような事実を明らかにしたことである。経済的基盤が脆弱な女子サッカーチームには、プロ選手契約とアマチュア選手契約が混在し、アマチュア選手の中にも、支援企業の社員選手、一般企業の社員選手、学生選手というように複数の競技実践形態（競技活動と労働・生活との相互規定的な関係をとらえるために筆者が独自に設定）が存在していた。そのため選手の間では「契約上のステータス」と「認識上のステータス」の不一致が生じた。これによってプロ選手はチーム内での自身の地位が脅かされる不安にさらされながら競技活動を行っていた。他方、競技活動を安定的に行うために支援企業で働くアマチュア選手においては、その労働によってかえって持続的な競技活動が阻害されるという面が見出された。これらは全国規模のリーグに加盟するローカル・サッカーチームで筆者が約10ヶ月に及ぶフィールドワークを行い、その記録をもとに分析・考察した成果であり、アスリートの競技実践形態を労働と生活を通して分析することで新たに抽出しえた本論文独自の知見であると評価できる。

2 つめは、上記の点（第4章～第8章）が、女子サッカー界の方針やリーグ形態といった制度にかかわる変化、企業チームの廃止によるNP0やクラブチームへの転換、それにとりま

って生じるチームの経済基盤の脆弱化と財源調達方法の変化（第2章～第3章）とのかかわりの中で論述された点である。NPO化・クラブチーム化によって外部資金獲得の必要に迫られたチームが行う地域貢献やPR活動、またチームに対する企業による支援活動の一環として行われる選手の雇用は、女子サッカー選手たちの競技活動を不安定にしたが、それはプロスポーツの財政基盤の構造的変化を反映した事象であったことが本論文全体を通して示されている。なお、外部資金獲得のために行われるチームの広報・宣伝活動には、女子サッカー選手に対して旧来のジェンダー・ステレオタイプにもとづいた役割が割り振られるといった伝統的なジェンダー再生産が組み込まれていた。

3つに、①サッカーという競技種目、②チームやクラブなどのサッカー界、③サッカー振興のための組織・機関、④職場、という4つの場のジェンダー構造の重なりから女子サッカー選手を分析した点である。これは、スポーツやサッカー界を一括りにとらえ単一的に論じがちな既存のジェンダー空間分析を乗り越えようとする試みであり、歴史・制度・エスノグラフィーを突き合わせながらこれに迫った点は本論文の特徴として評価に値する。

しかし、ジェンダー／セクシュアリティ研究の到達点から見ると課題も残されている。LGBTI 概念を含む多様な性や性自認の観点からの論及は十分とは言えず、また、性別によって分断されるスポーツの場を越境する競技実践事例が及ぼす影響を視野に入れることができなかった点などが挙げられる。エスノグラフィーを通して、女子サッカー選手の現場の声をすくいあげ、そこに寄り添いながら、その経験を掘り起こしたという独自の長所を認めつつも、そうした興味深い事実を結論部においてまとめあげる際の方法に課題が見られた。例えば、優れたサッカー選手に求められる「筋骨たくましい」身体への志向性と伝統的な性役割に象徴される「女らしい」身体への憧憬が一人の女子サッカー選手の中に同居していることをどう解釈するのか、また、ジェンダー秩序を変革する可能性を女子サッカーにどのように見出すことができるのかといった論点は十分説得的に論述しきれなかった。

こうした課題が残されているものの、男性のトップアスリートを中心とする従来のアスリート研究に対して個別の事例研究からジェンダーの視点を踏まえて批判的な問題提起を行ったこと、アスリートの労働と生活の詳細な内実を明らかにしたこと、女子サッカー研究に新たな地平を拓いたことは、本論文の研究成果として意義がある。

以上より、審査委員会は、著者を北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものとして認める。